

国内経済情勢

概 観

国内需要は依然盛り上がり乏しく、生産は抑制基調を続けている。こうした供給面の対策にさえられて、商品市況の面では、漸次底堅さを示す商品がふえつつあるが、これまで上げ足の速かった鉄鋼、繊維は実需の追従難などから人気が薄れ、9月央以降、訂正安をみている。企業の資金需要にはなお動意がみられないものの、金融機関の貸出態度は次第に積極味を増しつつあり、貸出金利も引き続き低下している。

国際収支は、経常収支が一段と好調を示したが、資本収支の赤字幅が拡大したため、小幅の黒字にとどまっている。

生産の抑制基調続く

鉱工業生産(季節調整済み)は、8月に前月比-2.5%減少のあと、9月は速報で+3.2%とかなりの増加となった。これには、一般資本財が電力向け大型機械の完工集中(前月は著減)を主因に著増したことが大きく響いているが、このほか輸送機械も、新車発売に備えた乗用車を中心に増加している。一方、多くの生産調整品種を含む生産財や建設資材などは、ここ2~3ヵ月減勢を示している。このところ鉱工業生産は一般資本財の不規則な増減で大きく上下しているが、こうした月々の増減をならしてみると生産はおおむね横ばいとなっており、依然抑制基調が続いている。

9月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は前月比+1.9%の増加となった。生産と同様電力向け大型機械の出荷増によるところが大きく、これを

考慮すれば、出荷はまだ横ばいの域を脱していない。とくに生産財の出荷は、鉄鋼、一般機械部品、化学製品などの不振を背景に、低調を続けている。

9月の鉱工業メーカー製品在庫(季節調整済み、速報)は前月比+0.9%と引き続き増加した。とくに新車発売関係の乗用車を中心に輸送機械の著増が目立ったほか、繊維、化学製品などでも依然増勢が続いている。しかし家庭用電器、紙パルプなどはこのところかなりの減少を続けており、また鉄鋼なども粗鋼減産の影響でようやく減少に転じている。こうした動向を映じ、鉱工業製品在庫率は横ばいにとどまっている。

なお設備投資の動向は、一般機械類の出荷や機械受注の動きなどからみて、依然低調を続けているものとみられる。経済企画庁の機械受注見通し調査(9月実施)では、先行きかなりの増加が見込まれているが、実現率を考慮すると、当面横ばい程度に推移する公算も少なくない。

主力商品の市況は訂正安、その他は強含み

9月から10月にかけての商品市況をみると、主力商品である鉄鋼、繊維は9月後半にはいり訂正安に転じた。一方、その他の商品のうち、化学製品などは依然軟弱な地合いを改めるに至っていないが、石油、セメント、紙、砂糖など多くの商品では、生産調整を背景に、需給関係が漸次改善に向かい、市況は引き続き底堅い動きを示している。

7月末来急伸をみた主力商品が上記のような動きを示したのは、期待された実需の増加がはかばかしくないうえ、米国の鉄鋼ストライキ回避やインドネシアの政情不安などに伴う輸出の先行き懸

念もからんで、これまでの先高人氣が剝落したためである。しかし減産などメーカーの真剣な市況対策を柱に、下値はかなりささえられているとみられ、現に10月央ごろから一部品種(鉄鋼薄板、綿糸など)には下げ渋りの気配もうかがわれる。

9月の本行卸売物価は前月比+0.5%と続騰したが、上記鉄鋼、繊維の動きなどを映じて、旬を逐って伸び悩み、10月にはいつてからは弱保合い(前旬比、上旬-0.1%、中旬保合)に推移している。

9月の消費者物価(東京)は前月比+2.0%と大幅に上昇した。その要因をみると、家賃地代、自由料金が引き続き上昇しているほか、台風の影響による生鮮食料品の急騰などがとくに目立っている。

金融機関の貸出態度は次第に積極化

9月の銀行券は49億円の還収超過となり、また財政資金も1,114億円の散超となったため、本行は約800億円の債券および手形の売却を行ない、本行貸出も241億円減少した。このため、金融市場は通月平穩裡に推移し、コール・レートは月初来各条件物とも日歩1厘低下した。なお10月にはいり、市場は一段と引きゆるみ、月初にコール・レートはさらに1厘低下した(無条件物1銭6厘、月越し物1銭8厘)。

9月の全国銀行貸出増加額は3,497億円と前年同月を39%上回った。これは、企業の資金需要は依然低調ながら、主として銀行が、期末預金増強などの兼合いで、かなり貸し進んだためとみられる。この結果10月にはいつてからの預貸金の減少はかなり著しいようである。もとより金融機関は、取引先選別の方針を改めてはいないが、中小企業金融機関なども含めて、総じて貸出態度に積極味を増しつつあるように思われる。このような情勢を背景に、貸出金利は低下傾向をたどり、ま

た大企業、優良中小企業を中心に、企業の手元は引き続き緩和してきている。

なお8月から9月にかけて上伸した株価は、その後一高一低のもみ合い商状のなかに、いくぶん地合いの軟化をみている。

国際収支は資本収支の赤字幅拡大から小幅の黒字にとどまる

9月の外国為替収支をみると、経常収支は、輸入の季節的な減少から一段と好調(黒字135百万ドル)を示した。しかし、資本収支が、引き続き長短インパクト・ローンの流出超、輸出手形の買増などの傾向に加え、ガリオア・エロア債務の返済など一時的要因もあって、赤字幅を拡大(赤字125百万ドル)したため、総合収支は8百万ドルの受超にとどまった。

9月の輸出は前年同月比為替で+27%、通関で+25%と依然高水準を続けた。ただ季節調整後の実勢でみると、前月比為替で-0.1%、通関で-8.7%と横ばいしないし若干の減少を示しており、月々のふれをならしてみても、このところ増勢にやや頭打ちの傾向がうかがわれる。先行指標である輸出信用状は、季節調整後の実勢では、ここ数ヵ月来横ばい状態を続けているが、前年同月比では引き続き高水準(+21%)を示している。

9月の輸入は前年同月比為替で+8%、通関で+7%と、引き続き落ち着いている。もっとも季節調整後の実勢でみると、前月比為替で+3%、通関で+5%の増加となっているが、これは、食料、木材、石油などの入着増によるもので、その他原材料輸入にはさしたる動意はうかがわれない。先行指標である輸入信用状、輸入承認も、依然落ち着いた足取りを示している。このような輸出入の動向からみて当面貿易収支はかなりの黒字基調を続けるものと思われる。